

第6回留学報告書

2021年6月

佐藤わかな

2018年8月からミネソタ大学のBiochemistry, Molecular Biology and BiophysicsのPh.D.過程に在籍している佐藤わかなです。今回は3年目の後期の生活についてご報告します。

【現在の生活について】

私の研究室では、研究室メンバーの全員が5月の初めまでにワクチンの摂取を終えたので、5月の中旬からはマスクも任意着用のほぼ通常の生活ができるようになりました。コロナ対策の規制が厳しかった間は、指導教官とはzoomを使ってミーティングを行なっていましたが、5月の末にはラボミーティングも対面でできるようになり、約1年3ヶ月振りに直接自分の指導教官の姿を見ることができました。現在は人数制限を気にすることなく朝から夕方まで以前と変わらず研究室に滞在できるようになったのでとても快適です。



コロナ後初のラボミーティングの写真
zoomとin personのハイブリッド形式

【研究について】

前回の報告書を提出した時期はなかなか実験がうまくいかなくて少し焦っていましたが、去年の12月から始めたテーマである程度まとまった結果が出る見込みになってきたので、今はそれを論文にするためのデータ集めをしています。このまま特に問題が起きなければ、夏中にはデータ集めを終わらせて執筆作業に入りたいという感じです。そうは言いつつ、実際はどんどん予定が押してしまうのです。例えば、この6月は使っている大腸菌の遺伝子がいつの間にか変異していて実験結果が変わってしまい、その原因を特定するために1ヶ月を費やしてしまいました。その過程も楽しみつつ進めていきたいです。

また、この夏休みはインターンシップとして私の研究室で働くことになった学部生のメンターもすることになりました。私の研究室では積極的に学部生を受け入れていて、ほぼ全ての院生やポスドクが学部生と一緒に実験をしているのですが、私はこれまで名乗りをあげていませんでした。というのも、私はこれまで人を指導する自信がなかったからです。しかし、2月にあったコミッティー（博士過程を通して指導してくれる教授で構成される委員会 - 私の場合自分の指導教官を含めた4人の教授で構成されます）とのミーティングでも、そろそろメンターの経験を積んだ方がいいと言われたこともあり、初めて学生を受け持つことになりました。その

学生は授業でしか実験の経験がなく、去年1年間はコロナの影響でラボの授業もオンラインになったしまったため、実験器具の使い方もほぼ忘れてしまったそうです。とりあえずは夏休みの間のみという短い期間ですが、実験の面白さを少しでも感じられるようなトレーニングの内容を考えられるよう意識して取り組んでいます。

【TA】

春セメスターは初めてTA業務に携わり、学部生向けのBiochemistryの授業を担当しました。TAの業務内容は、授業への出席、課題の採点、オフィスアワーでの質問対応、授業の代行を1回、全てオンライン上での業務でした。セメスターの前半と後半で担当する教授が違っていたのですが、前半はかなりTAの業務に時間が取られました。もちろん初めてのTAで勝手がわからなかったというのがありますが、週4日ある毎回の授業中に学生に出すクイズを考えたり、課記述式で採点基準が基本的にTAに任せられている記述式の課題の採点に時間を取られたりしました。週によっては、平日毎日2,3時間をクイズの作成に、週末は2日とも採点に費やすということもあり、思っていたより大変でした。しかし、後半になって担当教授が変わると一変し、クイズを考える必要もなくなり、採点基準も厳格に指示があったので、授業への出席以外は週4-5時間程度に収まる業務内容になり、TAをすることに対するストレスがほぼない生活を送ることができました。

【そのほか】

オンラインで魚の干物を購入しました。日本人の知り合いの方にアラスカからクール便で送ってもらえることを教えてもらい、送料を抑えるために14尾分まとめ買いました。1年半以上日本に帰っておらず、日本食への恋しさが募っていたので、日本で食べる干物と変わらない味に感動しました。

ミネアポリス生活も3年が経ち、テニスと一緒にしてくれる知り合いがだいぶ増えました。平日の夕方や土日に週2,3回の頻度ですることが多いです。夏の間は運動不足にならない生活が送れそうです。同時にどんどん日に焼けています。

【おわりに】

最後になりましたが、この留学生生活を支援、応援してくださっている船井情報科学振興財団の皆様には感謝申し上げます。また皆様にお会いできることを楽しみに、引き続き頑張ります。



干物と明太子が宝の山に見えました